



Title	『英米研究』第24号によせて
Author(s)	加藤, 正治
Citation	大阪外大英米研究. 2000, 24, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99238
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『英米研究』第24号によせて

加藤正治

西暦の数字が2000に変わったばかりで、何ともつかみ所のない期待感が思わず起ってきますが、そのような時に『英米研究』第24号を皆様にお届けできることはまことに喜ばしい限りであります。最初の頃は（後述の）*The Reeds*と隔年で発行されていた時期があったと聞いておりますので『英米研究』はその号数以上の歴史を持っていることになります。英語研究室発行の雑誌というかたちで出発いたしましたが、現在ではその発行母体は大阪外国语大学英米学会という学会組織になり、学会誌という肩書きを持つようになりました。一年に一回（場合によっては二～三年に一回）の発行であってもそれを継続させるのは並大抵のことではないことは言うまでもありません。これまで寄稿して下さった先生がたの熱意と愛情に支えられて24号まで数えることができました。今後30号、40号と順調に着実に号を重ねて行くことを願ってやみません。

一つ残念なお知らせをしなければなりません。『英米研究』と二枚看板であった*The Reeds*が前回の20号をもってその役目を終えることになりました。文学作品（等）の英訳が発表できる貴重な機会を与える雑誌というユニークな立場を維持して来ましたので、廃刊になるというのはまことに惜しい気がします。1955年に第1号が発行されておりますが、その年は（個人的なことですが）丁度私が生まれた年にあたります。2000年という年に20号で終わることが決まり、しかもそのことを第1号発行の年に生まれた私が皆様にお知

らせすることになるということは、なにかの因縁なのでしょうか。手元にある既刊の *The Reeds* の目次を見てみると、初期の頃の号には名前しか存じ上げていない（私の中では半ば伝説化した）先生がたが投稿していらっしゃいます。号が新しくなると学生時代に指導していただいた先生がたの投稿が見られ、それだけでそこに一つの「歴史」が感じられます。最初は100ページを優に超えていたものが第15号あたりを境に100ページ以下になり、第20号に至ってはわずか40ページ足らずになってしまっています。まことに寂しい現実であります。一つの時代が終わったということで、そこには別の意味での「歴史」が感じられます。

The Reeds はなくなりますが、その精神はなくなることはありません。形式上は『英米研究』に吸収合併されるかたちをとり、今後その精神は『英米研究』に引き継がれることになりました。今まで以上の大きな荷物を背負った『英米研究』がその重圧に押潰されることなく無事存続して行きますよう、会員の皆様の一層のご支援・ご協力を心からお願い申し上げます。